



2021

SEPTEMBER Vol.251

京都芸術センター通信 [明倫 ART]

Kyoto Art Center Newsletter | Meirin Art

Contents

01

Co-program 2021 カテゴリー-B「共同開催」

桐月沙樹・むらたちひろ

時を植えて between things, phenomena and acts

02

制作室使用者インタビュー

山口 茜 トリコ・A

03

アーティストのアタマのなか

合田団地

04

ロームシアター京都×京都芸術センター U35創造支援プログラム"KIPPU"

2021年度採択アーティストインタビュー

福井裕孝 × 敷地理

Report

本展は応募者のプランをもとにして京都芸術センターと共に展示する公募プログラム「Co-program」で採択され実現したものです。

京都を拠点に活動する桐月沙樹とむらたちひろは、今回初めての2人展だったといえます。密度の濃い対話の中で練られたタイトルの「時を植えて」には作品として結実するに至るまでに二人が込めてきた時間への意識など、様々な意味が込められています。

本展は新型コロナウイルスの影響を大きく受けた展覧会でもありました。当初は2020年に会期を予定していましたが、他の展覧会や事業が延期となったことから時期がずれ、

2021年4月17日から5月30日の展示期間へと変更(その後6月13日まで延長)。しかし開催からわずか1週間で緊急事態宣言が発出され、京都芸術センターは休館となり展示を継続することが出来なくなりました。

休館となる前日、むらたちから「休館中に染まる現象が進行する作品を設置したい」と連絡を受けました。天井から吊るした先染めした布を水に浸すことで、毛細管現象や時間経過によって色が広がっていくという作品でした。「展覧会としては止まっていますが、時が流れていることを現したい」という意図で設置したこの作品のドキュメンテーションは展覧

会の再開後、図書室で公開しました。また桐月も北ギャラリーで発表した連作の版木を、さらに彫り進め、新たな作品の展開と繋げていたといえます。

私たちは展覧会やプレゼンテーションという発表の場があって初めて作品に出会うことが出来ます。こうした発表の機会を持つことが難しいなかでも、アーティストにとっての制作は日常であり、続いていきます。施設としてどのように創作や発表の機会を支援していくのか、コロナ禍が常態化しつつある現在において、考えさせられる展覧会となりました。

REVIEW

アーティスト・トークにも出演いただいた渡辺亜由美さんにレビューを寄稿していただきました。

作品はどのように生まれ、どのように鑑賞者の元に届くのか。木版画を活動軸とする桐月沙樹と、染織表現の可能性を開くむらたちひろによる2人展、「時を植えて between things, phenomena and acts」は、このシンプルな問いに向き合い続けた展覧会だった。

本展の特徴は、南と北のギャラリーが通路で結ばれる京都芸術センター独特の空間に、自分たちの表現と関心、問題意識を的確に結びつけた点だ。南ギャラリーで展開されたのは、作品はどう生まれるか、すなわち本展サブタイトルの「物事、現象、



桐月沙樹(dance with time) (部分) 2021

そして行為のあいだ」の探求である。例えばむらたちは、自身が置いた一筆を合図に布が染まり、にじみ、定着する過程を、記録写真とその成果物を通じ私たちに開示する。一方、版木の木目を活かしながら彫刻線を加えてイメージを立ち上げる桐月は、細長い丸太を直立させ、傍には木口を刷った

時を植えて

Co-program 2021 カテゴリー B 「共同開催」

桐月沙樹
むらたちひろ

植えて

between things, phenomena and acts

Profile

桐月沙樹 Kirizuki Saki

兵庫県生まれ。2009年東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻領域卒業、2011年京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程絵画専攻(版画)修了。近年の展覧会に、「京都府新鋭選抜展」(京都文化博物館、2021)、個展「7月あたりの桐月さん。」(ギャラリー恵風、京都、2020)、個展「凹凸に凸凹—絵が始まる地点と重なる運動—」(ギャラリー崇仁、京都、2019)など。

むらたちひろ Murata Chihiro

京都府生まれ。2011年京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程工芸専攻(染織)修了。近年の展覧会に、個展「すべてしるべ 2020 #01 時の容」(オーエヤマ・アートサイト、京都、2020)、「京都府新鋭選抜展」(京都文化博物館、2019)、「染・清流展」(染・清流館、京都、2019)、個展「Internal works / 境界の渉り」(Gallery PARC、京都、2018)など。
<https://murata-chihiro.tumblr.com/>

Co-program 2021 カテゴリーB「共同開催」
桐月沙樹・むらたちひろ

『時を植えて between things, phenomena and acts』

日時：2021年4月17日(土)ー6月13日(日)
10:00ー20:00

休廊日：4月25日(日)ー6月1日(火)

会場：ギャラリー南・北

【関連企画】

パフォーマンス

むらたちひろによる染めのパフォーマンス。

日時：4月17日(土)10:30/15:00

会場：ギャラリー南

アーティスト・トーク

本展の作家によるトーク。無観客および映像配信にて実施。

登壇：桐月沙樹、むらたちひろ、
渡辺亜由美(滋賀県立美術館 学芸員)

映像配信：京都芸術センター

公式YouTubeチャンネル

<https://www.youtube.com/watch?v=RSDXkgjZYFO>



3つの木版画をそっと置く。それによって、樹齢を刻む丸太そのものが作品の生成過程と分ち難く結びついていることを象徴的に伝えた。布という対象に染める行為を加えることで、染まる現象を起こすことがむらたちの仕事とするなら、彫刻を通じて版木に内在する時間を引き出すことが桐月の仕事であることが、ここで提示される。

こうした物事/現象/行為の往還が結実し「作品」となったものを、今度は受け手にどうやって届けるのか。まっすぐに問いかけたのが北ギャラリーの空間だ。桐月の《dance with time》は、一枚の版木からイメージを立ち上げる手法を引き継ぎながら、丸太の虫食い跡からインスピレーションを受けたという丸刀の彫りによって、最終的にすべてのイメージが白い光の中に包み込まれる9枚組の連作である。木目と戯れる線が増殖し、ロープ、花、リボン、水面、壺などの多様なイメージが現れては消える画面の推移はまるで変奏曲のようで、桐月の木版画は常に変化しうる動態であることを雄弁に

語る。他方むらたちは、布の中に時間を閉じ込める。大きな青色のストロークと染料の滲みによる濃淡が深い奥行きを生む《beyond 05》は、染める/染まるという行為と現象を行き来する中で辿り着いた、シンプルで力強い大画面だ。自然現象たる「染め」をコントロールしつつ細部は偶然に委ねるという、素材への信頼や好奇心が本作には宿っている。むらたちの制作は常にこの「染まる/染める」ことへの関心から出発していると言えるのだが、一方で行為の結果たる作品の抽象的なイメージゆえに、我々は彼女の作品を絵画的なものへと置換し、その範囲の中で解釈しようとしてしまうことも、また事実である。しかし本展全体のプレゼンテーションに即して考えた時、私たちのこうした態度、つまり見知った何かに擬えて眼前の作品を捉えようとする姿勢こそが、もっとも批評的に問われた点だったと感じる。むらたちの眼差しは、イメージを生み出すことよりもむしろ、規定のフォーマットを持たないがゆえに平面的にも空間的にも展開できる染織そのものに、まず

もって注がれる。ひとつの染料が布の上でまた別の染料とぶつかり、滲み、新しい色を生み出すように、むらたちは工芸・絵画・写真といった既存の領域が溶け合った先の風景を、時間をかけて探り、同じくらい時間をかけて我々に示そうとしているのではないだろうか。同様に桐月の作品も、版画=複製芸術/平面という私たちの単純な理解を、ゆっくりと溶かしてくれる。天に向かって伸びる丸太が語るように、イメージを紙の上で躍動させるのは、重さや厚みを持ち、それ自身が時間を内包する樹木そのものだと気づくのだ。

このように本展は、つるごとく/届けることへの祈りにも似た信念を隅々まで貫いたものだった。両ギャラリーをむすぶ通路を通る時間は、まるで作家たちの思考の跡と一緒に行き来するようでもあった。ふたりの作家は誠実でまっすぐな作品を通じ、私たちが作品を見るまた別の回路をひらいてくれた。

渡辺亜由美(滋賀県立美術館 学芸員)

2021年度採択アーティストインタビュー

福井裕孝 × 敷地理

若手アーティストの発掘と育成を目的に、ロームシアター京都と協働して行う創造支援プログラム“KIPPU”。創作場所として京都芸術センターの制作室を、発表場所としてロームシアター京都 ノースホールを提供しています。2021年度に採択された福井裕孝と敷地理の2人にインタビューを行いました。福井は7月に公演『デスクトップ・シアター』を終え、2022年2月に公演を予定する敷地理は現在、フランス・パリで滞在制作をしています。

— 改めて、ご自身の活動について教えてください。

敷地理 主に振付家・ダンサー・パフォーマーとして活動しています。劇場で発表する作品や、ギャラリーで発表するパフォーマンスやビジュアルアートの平面作品なども創作します。パリで滞在制作中で、今は個々の身体性に興味があります。ダンスの学校などに通ったことのない自分が、どのような身体表現をできるのかを考えています。強固に確立されるひとつの身体性というよりは、個々人の身体性を引き出すような空間やシステムを、いかにハードとソフトの両

方からつくるかをリサーチしています。

福井 演出をしています。団体ではないので、作品ごとに出演者やスタッフを集めてつくっています。ゼロから何かを立ち上げるというよりは、日常的な振る舞いや生活の中にあるものなど、すでにある時間の流れや空間の制度に添うように、状況やひとつの持続する時間をつくることを考えています。ある空間や場所と関わる時に、「もの」を媒介としてよく使います。『デスクトップ・シアター』では、劇場空間と関わるためにテーブルというものがあって、またテーブル上の空間と関わるために生活用品など沢山のものを使いました。



敷地理『happy ice-cream』(2020) 撮影：菅原康太



福井裕孝『デスクトップ・シアター』(2021) 撮影：中谷利明

— 劇場での発表についてどのように考えていますか？

福井 やりたいことをするための均質な場ではなく、劇場もひとつの固有の場所として考えたいと思っています。空間のしつらえとして劇場へのこだわりはあまりないですが、演劇を観る場としての共通認識や黒いものは存在しないことになるといような暗黙のルール、またそれらを成立させてきた文脈には興味があります。今回は、劇場の制度や上演自体を内側から捉え直すようなことも考えていましたが、記録写真や映像を見て振り返ってみると、むしろいつも以上に演劇らしいものになったように感じています。



敷地理 劇場で発表をするには関わる人も予算も増えるので、サポートがないと難しいというのが前提としてあります。また今回の作品のコンセプトである、「空間ごととサンプリングする」という

ものに、劇場というフラットな空間は合うと思っています。

— これまでに影響を受けた表現はありますか？

福井 お笑いが好きで、高校時代に友達とネタを作ったりして、そういうことをきっかけに演劇を始めました。それから、現代美術家の関根伸夫さんの空間把握やものを扱う手つきに影響を受け、つくるといよりも現実に対して直接働きかけるような、今のつくり方に近づいていきました。

敷地理 幼少期に行っていたサッカー観戦が原体験かもしれません。プレイヤーに憧れて、観ているだけでは楽しめなかったんです。少年漫画の主人公になりたいような気持ちがありました。最近気になっているのは、rapperです。考えるよりも先に言葉を紡ぐような身体性は、コンテンポラリーダンスにおいて身体の一部が思考とは離れて勝手に動くようなそれと共通するものがあると感じます。

福井 僕もrapperは好きですが、自分にはいものを持っているっていう、憧れに近いです。ちなみにサッカーもやっていましたが、やるのはうまくないので、人とボールが動いてんなって外から観てる方が好きです。

— 自身が中に入って動くか外から見るか、rapperやサッカーなど日常的なものへのまなざしにも、それぞれパフォーマー／演出家として、作品に対する関わり方が垣間見えました。お二人の今後のご活躍を楽しみにしています！

2021年7月13日(火) オンラインビデオ通話にて採録

Profile

福井裕孝 Fukui Hirokazu
1996年京都府生まれ。人・もの・空間の関係を演劇的な技法を用いて再編し、その場の状況を複数のスケールやパースペクティブから捉え直す。近年は、天井・周壁・床面によって仕切られた「部屋」という空間単位との関わりをなかで作品を製作する。主な演出作品に『インテリア』(2018、2020)、『マルチルーム』(2019)、『シアター・マテリアル』(2020)など。

敷地理 Shikichi Osamu
振付家、演出家、ダンサー。外側から自分を見るのが不可能な中で、物質的に自分と最も近い他者を通して自分の現実感を捉えることを主題に制作を行う。その過程で身体的臨界状態をつくり、その境界を確認し曖昧にすることに興味を持つ。最近の活動に『happy ice-cream』(横浜ダンスコレクション2020)、『振動する固まり、ゆるんだ境界』(TPAM2020 Fringe)など。

福井裕孝『デスクトップ・シアター』
制作室使用：2021年4月9日(金)–6月27日(火)
公演：2021年7月2日(金)–7月4日(日)

敷地理『循環、都市、律動、私たちの最後の7分間』
制作室使用：2021年11月–2022年2月(予定)
公演：2022年2月

元明倫小学校について

京都芸術センターは、元明倫小学校の校舎を再活用して運営されています。

古くより呉服問屋で栄えた明倫学区には祇園祭の山鉦町が多く、文化や教育への関心の高い地域でした。

当時の最先端技術を用いた鉄筋鉄骨の堅牢な佇まいと、和洋折衷の意匠を凝らした豪華で華麗な校舎は、1931年の大改築によるもので、東洋一の学校建築と称賛されました。現在もほぼ当時のままの姿を見ることができます。

2008年	2000年	1993年	1931年	1869年	1875年	1918年
国の有形文化財に登録	京都芸術センター開設(4月1日)	「明倫小学校」もって閉校(3月31日)	新校舎(現在の建物)竣工	「下京三番組小学校」として開校(9月16日)	心学講舎「明倫舎」を校舎に充てたことにちなんで「明倫小学校」と改称	明倫小学校50周年。アントン・ベトロフ社のピアノ(1910年製)が寄贈される。
			※中村大三郎画伯、明倫小のベトロフピアノをモデルにしたピアノを第7回帝展(1926年)に出展。			

1931年竣工当時の2階 講堂

1931年竣工当時の明倫小学校。設計：京都市営繕課

PICK UP EVENTS

2021.SEP.-DEC.

主なイベントを掲載しています。その他のイベントはウェブサイトをご覧ください。主催・問合せの表記がないものは全て京都芸術センター。

KAC Performing Arts Program
2021/Theater 合田団地『リゾート(なかつた青春の末路としての)』友
●9月25日(土)、26日(日)14:00/18:00
●フリースペース ●一般2,500円 U25 1,800円(当日各500円増)

ニュー・ブランシュ2021
クリスティーナ・ルーカス 映像展『次の世界へ〜Vers l'autre Monde』
●10月1日(金)–10日(日)10:00–20:00 ※10月1日は22:00まで ●講堂、フリースペース

KYOTO EXPERIMENT2021 AUTUMN
ホー・ツーニェン『ヴォイス・オブ・ヴォイド 一虚無の声』(YCAMとのコラボレーション)
●10月1日(金)–24日(日)10:00–20:00

※10月1日は22:00まで ●ギャラリー南、大広間、和室「明倫」、制作室4ほか ●無料(VR体験は一部事前予約可)

Kansai Studies
●【展示】10月9日(土)–24日(日)【クロージングイベント】10月24日(日)19:30 ●制作室1 ●無料

和田ながら×やんつー『擬境(ぎべん)』
●10月16日(土)13:00/17:00★、17日(日)13:00/17:00 ●講堂 ●料金:下記を参照

鉄割アルバトロケット
『鉄都割京です』
●10月22日(金)19:00、23日(土)14:00、24日(日)15:00 ●フリースペース ●料金:下記を参照

●一般3,000円 U25・学生2,500円 高校生以下1,000円 ペア5,500円(当日各500円増、全席自由) ★…終演後、ポスト・パフォーマンス・トークあり、♡…託児あり ●主催・問合せ:KYOTO EXPERIMENT事務局

明倫レコード倶楽部【其ノ76】
「馬」の音楽 友
●11月3日(水・祝) ●講堂 ●講師:いししんじ ●500円

Co-program 2021 カテゴリーC
(共同実験)採択企画
松尾加奈、楊淳婷「作り手のためのインターバル—今なぜ“アートコレクティブ”なのか—」
●11月6日(土) ●フリースペース ●500円
●主催:松尾加奈、楊淳婷、京都芸術センター ●問合せ:インターバル2021運営事務局(intervalforartists2021@gmail.com)

Co-program 2021 カテゴリーA
(共同制作)採択企画
はなもとゆか×マツキモエ『DAISY』友
●11月18日(木)–20日(土) ●講堂 ●主催:はなもとゆか×マツキモエ、京都芸術センター

FOCUS#3 マヤ・ワタナベ展
●11月20日(土)–2022年1月10日(月・祝) 10:00–20:00 ●ギャラリー南・北 ●無料

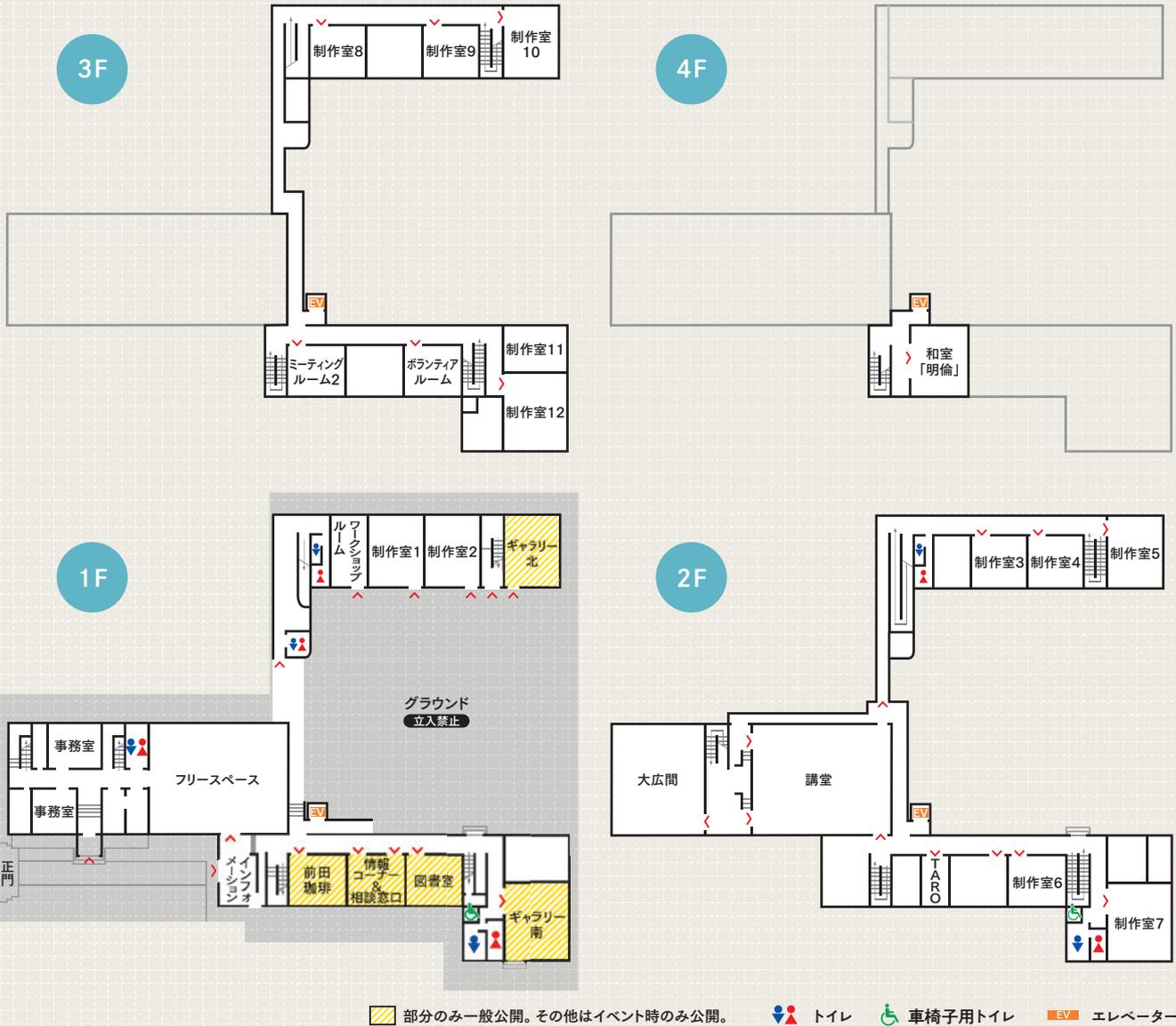
第264回市民狂言会
●12月3日(金)19:00(18:00開場) ●京都親世会館(京都市左京区) ●S席4,000円 A席3,000円(当日各500円増) ●主催:京都市、公益財団法人京都市芸術文化協会

KAC Performing Arts Program 2021/Music 北爪裕道 友
●12月11日(土)、12日(日)

Co-program 2021 カテゴリーA
(共同制作)採択企画 劇団しようよ 友
●12月17日(金)–19日(日) ●主催:劇団しようよ、京都芸術センター

[アイコン]
美術 伝統 音楽
ダンス 演劇
トークイベント
友の会招待券利用可

Floor Map



京都芸術センター通信「明倫art」は、2000年4月に創刊し、京都芸術センターの展覧会や公演、ワークショップ、制作室使用者の情報などを広くお知らせしてまいりました。2006年からは関西圏の展覧会・パフォーミングアーツのレビュー(批評)も掲載するなど、毎月様々な情報を発信し、これまでの発行回数は250号を数えます。

本号より、京都芸術センター通信「明倫art」は季刊発行となることをお知らせいたします。これまで掲載していたイベントや公演に関する情報は毎月配信するメールニュース

にて発信し、本誌は施設紹介と事業紹介を併せた媒体としてリニューアルいたします。京都芸術センターにまつわる「人」「もの」「こと」を取り上げながら、京都芸術センターの「いま」を紹介していきます。

メールニュースの購読をご希望の方は
右記QRコードまたはURLよりご登録ください。
<http://eepurl.com/hwb1iD>



京都芸術センター KYOTO ART CENTER

- 交通案内**
- 市営地下鉄烏丸線「四条」駅／阪急京都線「烏丸」駅 22番出口・24番出口より徒歩5分。
 - 市バス「四条烏丸」下車、徒歩5分。

- 開館時間**
- ギャラリー・図書室・情報コーナー・チケット窓口 10:00～20:00
 - カフェ 10:00～20:00
 - 制作室、事務室 10:00～22:00
- ※開館・閉館時間はウェブサイトでご確認ください。

休館日 12月28日から1月4日
※設備点検のため臨時休館することがあります。



〒604-8156 京都市中京区室町通蛸薬師下る山伏山町546-2
TEL : 075-213-1000 FAX : 075-213-1004
E-mail : info@kac.or.jp

指定管理者：公益財団法人京都市芸術文化協会

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、当面の間、開館時間を短縮します。最新情報はウェブサイトでご確認ください。



公式ウェブサイト
<https://www.kac.or.jp>

- facebook [kyotoartcenter](https://www.facebook.com/kyotoartcenter)
- twitter [@Kyoto_artcenter](https://twitter.com/Kyoto_artcenter)
- instagram [@kyotoartcenter](https://www.instagram.com/kyotoartcenter)
- youtube [KYOTO ART CENTER](https://www.youtube.com/KYOTOARTCENTER)
京都芸術センター